

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

近世初期における鷹の獲得をめぐる政治と地域社会 ： 下総・上総両国内に飛来した隼を事例として

著者	根崎 光男
出版者	法政大学人間環境学会
雑誌名	人間環境論集
巻	10
号	1
ページ	1-10
発行年	2009-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/6309

近世初期における鷹の獲得をめぐる政治と地域社会

——下総・上総両国内に飛来した隼を事例として——

根崎 光 男

はじめに

わが国には古代以来、鷹狩の伝統がある。鷹狩は鷹を使って鳥や小動物を捕獲する狩猟の一方方法だが、鷹は古くから権威の象徴として位置づいてきた。具体的には、律令制社会以来、公的には天皇のほか、一部の特権階級のみが鷹狩を許され、それ以外の者の鷹の使用は禁止された。近世社会のもとでは下級武士および一般庶民の鷹狩は固く禁じられ、天皇・公家および將軍・大名、そして特定の上級武士に限られた特権として位置づけられていた。⁽¹⁾ もちろん、これらの人々の鷹狩の特権が時間的あるいは政治的にどのように変容していったかは改めて究明する必要があることはいうまでもない。

そしてこの鷹狩のためには、まず何よりも鷹の入手が不可欠であり、その際用いられる鷹には熊鷹・大鷹・鶴・雀鶴・隼などが使用された。鷹はどこにでも生息しているものではなく、その習性上、生息地が限られていた。このため、徳川政権は鷹が生息する全国の山林の一部を御巣鷹山あるいは鷹巣山に指定してその支配下においたり、また大名・朝鮮などから鷹を献上され、さらには幕府鷹匠を諸国に派遣したりして鷹を確保していた。⁽²⁾ その際、鷹生息地付近の領主および地域社会と諸関係を築く必要があり、特に村人たちはその管理や捕獲をめぐって動員され、あるいは生活上の規制を受けた。また、鷹および「御鷹之鳥」の贈答は、天皇と公家、天皇と將軍、將軍と大名、そして公家や

大名の間などでも行われ、主従関係を映し出すほか、友好の証としての機能も有していた。

近年、鷹の獲得をめぐっては、將軍・大名間の贈答儀礼が將軍權威との関連で研究が進み、また御巣鷹山の設定とその管理体制なども領主と地域社会との関係のなかで明らかにされてきた。

そこで、本稿では自然に生息する鷹の獲得をめぐって、これまで研究の対象地域が松前・奥羽・上野国を中心としていた状況に鑑み、まったく知られていない下総台地や九十九里海岸一帯に飛来した隼の獲得をめぐる領主と地域社会の関係を追究していきたい。

この一帯は、近世において常陸国鹿島とともに隼の捕獲地として知られており、この地域の隼の獲得をめぐってどのような社会的諸関係が築かれていたのかを考えていくこととする。また、近世社会において下総・上総両国がどのような政治状況下に置かれていたのかは、いくつかのアプローチがなされているが、権力者や地域社会と自然とのかわりという視点からの研究はなく、そのことも視野に入れて究明していくことにしたい。

一 隼捕獲地としての下総・上総両国

(一) 隼の飛来地と鷹狩

鷹狩に利用される鷹のうち、隼はアジア大陸の北方で繁殖し、初秋頃南方に向かって「渡り」を開始する。その一部が日本にも飛来し、

山間の森林や岩上などに生息し、好んで海岸にやってきては千鳥・鳩・鴨・兎などを襲って餌とする習性をもっている。そして、雫は鷹のなかでも捕鳥能力にすぐれていたことから、洋の東西を問わず、大鷹とともによく鷹狩に利用されてきた。雫を使つた鷹狩は、「抜打ち」といつて直接に獲物に飛びかかる方法もあったが、通常はまず雫を飛び立たせ、鷹匠の頭上の周辺を大きな円を描くように高く舞わせながら、獲物の雁や鴨などに襲いかかる「上げ鷹」という方法がとられることが多かった。このように、雫による鷹狩は他種の鷹では味わえない捕鳥の勇壮さをもち、醍醐味ある狩りであつた。なお、正確には雫というのは雌であり、雄の場合は鶴の字をあてた。

全国的にみた場合、鷹の生息地は蝦夷地や奥羽地域に多くみられたが、信濃や飛騨などの山間地も重要な地域であつた。近世中期以降に編まれた「諸国鷹出所地名」や「鷹出所名録」^⑤には、全国の鷹生息地約七〇〇地域が書き上げられているが、その七〇パーセントを松前・奥羽地方が占めている。このデータが全国の鷹生息地の状況をどの程度反映しているのかは定かでないが、きわめて多くの地域が網羅されている点で重要な史料であることは間違いない。これらの文献では、鷹の種類を識別してその捕獲地を特定していないが、なかには出羽国秋田藩の項に「下総・新田」、下野国日光の項に「下総・湊」、常陸国鹿島の項に「下総・伊予宿」、下総の項に「八幡」、伊予の項に「下総・行徳」、上州の項に「上総軍・伴洲」などの記述がみられる。近世中期以降、東関東では、常陸国鹿島とともに、下総・上総両国が鷹の捕獲地となつていたことが知られる。

次に、近世初期の下総国内における雫による鷹狩について確認しておきたい。深溝松平氏の系譜を引く松平家忠は、天正十八年（一五九〇）徳川家康の関東移封に伴い、武蔵国忍城に入り、同国埼玉郡内に一万石を領した。その後、文禄元年（一五九二）二月に下総国香取郡

上代に移り、同三年さらに転じて同国同郡小見川（小美川）城主となり、下総国香取郡、上総国長柄・武射・山辺・望陀の五郡内および同国吉倉・平川両郷を領した。

その松平家忠が著した『家忠日記』によれば、下総国上代に移つてまもない文禄元年十月十二日条に「雫一ツかい候」とあつて、この「かい」が「買い」なのか、「飼い」なのか判然としないが、雫を所持していたことがわかる。同年十一月二十五日条には「雫二生雁とりかい候」とあり、家忠は雫を使つた鷹狩をおこない、雁を生捕つていた。翌二十六日条にも「雫つかい二出候」とあつて、続けて雫による鷹狩に出かけていた。また、同年十二月七日条には「雫うり、ひたちより越候」とあり、雫の売人が常陸国内からやってきていたことが知られる。このことから、家忠は雫を購入して入手していたと推定される。以後も、雫を使つた鷹狩の記事がみられる。

家忠の狩猟は鷹狩ばかりでなく、文禄元年十二月二十二日条に「をい鳥かり二出候、雫子二ツ」とあるように、追鳥狩もおこなつていた。こうした狩猟による獲物は、自らの食料となつたほか、家臣への振舞い、そして徳川家康への献上品ともなつた。同月晦日条には「江戸へ越候、御蔵葬二城へ出候、ひしくい二ツ」とあり、家忠は江戸城に出向き、家康に歳暮として菱喰二羽を献上していた。近世初期には鷹狩による獲物としての鳥類の贈答儀礼や振舞いが大名・上級家臣間および城主・家臣間で広範に展開していた。またこの時期、雫による鷹狩も頻繁におこなわれていたことがわかる。

（二）雫の確保と秋田藩佐竹氏

豊臣政権のもとで常陸国などに五四万五〇〇〇石を領した佐竹義宣は、関ヶ原の戦いで西軍に属したことにより慶長七年（一六〇二）「天下人」となった徳川家康からその領地を没収され、出羽国久保田（秋

田)に移され、二〇万五〇〇〇石に減封された。義宣はこの領国で鷹狩をおこなったほか、元和二年(一六一六)十月に幕府から武蔵・下総・常陸三国にまたがる一帯に恩賜鷹場を下賜されたことで、この地域にも頻繁に鷹狩に出かけた。

義宣の家臣梅津政景が記した日記は、『梅津政景日記』(以下、『政景日記』と略す)としてよく知られているものだが、その寛永五年(一六二八)九月二十二日条には「鹿島へ隼買ニ参候高橋内蔵丞、しもおさ(下総)へ隼かひに参候山科多兵衛所へ飛脚指越、来月十日時分迄も罷有、御鷹かひ候て可参由、申遣し候」(カッコ内は筆者註記、以下同じ)とあり、藩主佐竹義宣が隼の購入のために家臣を常陸国鹿島と下総国に派遣していたことがわかる。大鷹の生息地として知られる奥羽の大名でさえ、隼を入手するために東関東の太平洋沿岸地域に赴かなければならなかったのである。

同日記の寛永七年八月二十五日条にも「かしま(常陸国鹿島)・うなかミ(下総国海上)へ隼為御所望と、御走衆三人・御鷹師壹人被遣候、小判八両・壹歩十、高橋内蔵丞・岩村瀬兵へニ渡ス、其切手手前二有」とあり、ここにも常陸国鹿島と下総国海上に隼を求めて家臣を派遣していたことが示されている。隼購入の資金として藩から渡された金額は小判八両と一分金一〇枚であり、全体で金一〇両二分であった。同年十月十日条には隼の買い付けに派遣された家臣らが国元に帰ったことが記録されている。それには「かしま(鹿島)・下総へ御鷹買ニ被参候御走山科多兵衛・高橋内蔵丞・岩村瀬兵へ・村井三左衛門御算用極、残金貳両壹歩、御前へ指上申候」とあり、隼を何居仕入れてきたかは不明だが、残金二両一分を藩に返却している。つまり、この時隼の購入に金八両一分を支出したのである。一カ月以上にわたって家臣四人を派遣した出張旅費、それに隼購入代金を加えれば、藩財政に少なからず影響を与えたものと思われる。

これに先立つ元和七年十二月、秋田藩では隼の購入代金の着服事件が発生していた。日記の同月八日条に「御渡野にて欠落候高根沢孫兵へ、去六日之晚表御門ノ出かうし(格子)より足輕を頼、弥五郎(渋谷宣光)下正兵へ所へ書申遣、其身ハ見へ不申候、其状之様子ハ、十月うなかミ(海上)へ御鷹買ニ御鷹師志賀舍人・輕米佐々右衛門と参候て、はやふさ(隼)三つやすく買候て、金二両つ・二買申たる由申上、はやふさ三つの分小判六両うけ取、あまりかね(余り金)を三人してわけぬす候と見へ申候」とあり、隼の購入に派遣された鷹師らが隼三居を安値で購入しながら、藩に一居二両と申告して金六両を受け取り、その残金を着服したという。かれらが「鷹買候所ハ鹿島二もうなかミ(海上)にも無之由」とあつて入手地域が明らかにならない。

この事件以前にも、常陸国鹿島に隼買いに派遣された幡屋小兵衛・下田甚吉には藩の公金横領の嫌疑がかかったことがあった。しかし、この二人は隼一居につき金二両で二居を購入し、このほかのちのちの手付金として金一両を同国鹿島郡宮中の園部彦十郎に渡していたが、その内容に偽りがないことが証明され、疑いを晴らしていた。元和七年十二月十七日条にも「幡屋小兵へ・下田甚吉書付のことく、きうちう(宮中)のそのべ(園部)彦十郎・うなかミ(海上)の小川村喜右衛門書付不相替、小判貳両二はやふさ(隼)壹つ宛売候由書付有、就之、即小兵へ・甚吉をハ無子細由被仰出、御ゆるされ候」とあつて、この二人の隼の購入には不正がなかったことが示されている。ここでは常陸国鹿島郡宮中の園部彦十郎や下総国海上郡小川村の喜右衛門が秋田藩の隼の買い付けにかかわっていたことがわかる。

このうち、園部彦十郎の役割については「きうちう(宮中)の彦十郎と申者之所ニやと(宿)取申候て居申候、御はやふさ(隼)ハやとの彦十郎ヲ同心仕候て、うなかみ(海上)へ罷越候、御はやふさをハ、彦十

郎相調申、沓つ二付金子式両宛彦十郎二相渡、式つノ御應請取申候」^⑨とあり、秋田藩から隼の買い付けに派遣された家臣は鹿島郡宮中の園部彦十郎宅を宿にして彦十郎とともに下総国海上郡に出向き、隼を購入していた。つまり、園部彦十郎は秋田藩家臣に宿を提供するかたわら、海上郡内などに生息する隼の売買斡旋をおこなっていたのである。このことから、下総国海上郡小川村の喜右衛門も隼の調達にかかわっていた人物であつたと推察される。また、志賀舎人らよりも遅れて鹿島に派遣された小野崎左近らは、「御はやふさ(隼)沓つ沓両沓歩」^⑩で購入し、同年十二月十七日に国元に帰国していた。隼の値段は一定していたわけではなく、その大小・質および需給関係で変動していたようである。

このように、秋田藩では、鷹狩で用いる隼を求めて、常陸国鹿島郡や下総国海上郡に家臣を頻繁に派遣していた。その買い付けをめぐるのは横領事件が発生するほど、多額の取引が行われていたのである。また、その飛来地では隼の売買を仲介する者の存在が確認できたが、その人物がどのような身分や階層なのかは具体的に判明しない。また実際に、隼の捕獲がどのような社会関係を伴っていたのかも『政景日記』からは窺い知れないので、次節でその一端を探っていくことにしたい。

ところで、出羽国秋田藩領は大鷹の生息地であつたが、元和四年九月に出羽国米沢藩主上杉景勝の家臣が鷹を求めてやってきた時、秋田藩では次のように返答している。『政景日記』の同月十一日条には「爰元二ハ売鷹一切無之候、当国にて被取候鷹ハ、上様(二代將軍徳川秀忠)へ進上被致、義宣(秋田藩主佐竹氏)手遣二ハ松前より毎年所望被致候段、委申渡、松前へ被参候而可然由、申渡候」^⑪とあつて、藩領内で捕獲した鷹は將軍に献上するものであり、藩主の佐竹義宣が使う鷹は松前から入手している有様なので、松前に行ってみてはどうか

と答えていた。領内に生息する鷹は將軍に献上することが義務付けられていたがために、佐竹氏は大鷹や隼を求めて松前や常陸・下総両国に家臣を派遣していたのである。ここには佐竹氏の將軍に対する従順な姿勢が垣間見られるが、佐竹氏は領内に生息する鷹を將軍に献上する義務を負うことで領国支配の正統性を付与されていたとみられる。すなわち、佐竹氏に課された役負担の一つが鷹の献上だったとみてよいだろう。

二 隼の獲得をめぐる社会関係

(一) 戦国大名北条氏の隼の確保体制と徳川氏の関東入国

鷹狩は近世からはじまった狩猟ではない。その歴史は古代にまでさかのぼるのだが、ここでは近世の鷹の入手を考える前提として戦国末期を視野に入れて鷹の入手のあり方を探っていききたい。特に、下総・上総両国内に生息した隼の入手体制を考察するなかで、その社会関係を中心にみていくことにする。

天正十七年(一五八九)八月二十四日、関東の戦国大名北条氏政は、下総国の豪族千葉氏の重臣であつた原若狭守らに次のような朱印状を発給した。^⑫

隼之事、任先規之証文、桜井太郎兵衛二印判を遣候、作倉(佐倉)名跡被相移以前之儀者、小田原へ直二可被相納、一ツ成共、洩他所由、至于聞届者、可為私曲者也、仍如件

己丑八月廿四日^⑬ (「有効」朱印) 山角紀伊守奉

原 若狭守殿
同 大炊助殿

「有効」の印文を有する朱印は北条氏政が使用していたものであり、氏政は下総国内の小弓・白井城の城主原胤栄に対して「作倉(佐倉)名跡被相移」までは相模國小田原城に隼を上納するように命じている。

小田原城は北条氏の居城であり、また原氏は佐倉城（本佐倉城）の城主千葉氏の有力家臣だが、この頃主家千葉氏を凌ぐ勢力をもっていた。特に、千葉邦胤が天正十三年五月に近臣の怨恨により殺害されたことで、その後実質的には原若狭守が千葉氏を代表する立場となっていた。なお、「作倉（佐倉）名跡被相移」とは、千葉邦胤の養子となっていた北条氏政の子七郎が正式に千葉氏を相続することを示している。

つまり、北条氏は血縁関係をもつ七郎が千葉氏の名跡を継承するまで、その所領内に飛来する隼を自らに上納するように命じていたのである。これは北条氏と千葉氏との間に上下関係が存在したことを示している。千葉氏一統は、北条氏に従属する証として領内に飛来する隼の上納を義務付けられ、またこの隼を他所に流出させることを禁じられていた。北条氏は千葉氏との上下関係を梃子に下総国内の隼を獲得する体制を築き、いっぽうで千葉氏一統はこの義務を果たすことで下総国内の所領支配を保障されるという、両者の間には互酬的関係が存在した。その意味で、北条氏の鷹の確保のうえで、下総の隼は重要な位置を占めていたのである。

このように、権力関係における上位者と下位者との間には、さまざまな支配関係が投影されている。天正十七年、北条氏は下総の領主井田因幡守に対して「於其方領分、以鉄砲鳥射事、尤可停止候²³」という内容の朱印状を発給している。これは井田氏が自らの所領で鉄砲を使って捕鳥することを禁止されたものであり、北条氏の強権的な姿勢を読み取ることができる。おそらく、井田氏の所領が北条氏の鷹野あるいは留野に指定されていたのであろう。いづれにしても、権力の上位者は上下関係を梃子に下位者にさまざまな規制や役負担を課すことで、上位の権力者としての立場を自ら創出し、社会的諸関係を体制化していたのである。

ところで、天正十八年、豊臣秀吉の小田原攻めによって北条氏が滅

ぼされ、かれに従属していた千葉氏一統はその所領を没収された。その結果、同年八月、関東には徳川家康が封ぜられた。これによって、下総・上総両国には家康の上級・下級家臣が配置され、一部は徳川氏の蔵入地となった。前述したように、家康の上級家臣の一人松平家忠は文祿元年（一五九二）武蔵国忍から下総国上代に移り、隼による鷹狩などをおこない、その獲物は家康への献上品にもなっていた。この時期、家忠は隼を購入により入手していたようであり、その捕獲は認められていなかったと推定される。ただし、隼での鷹狩は認められており、これによって捕獲した獲物は贈答儀礼の対象になっていた。家康と松平家忠との間に隼の上納をめぐる支配関係があったことを示す事実関係を確認できないが、鷹狩で捕獲した獲物の贈答に伴う儀礼が示すように新たな社会関係が築かれていたのである。

さて、家康の関東入国後の下総・上総両国の政治的位置を鷹場との関連で確認しておこう。江戸幕府開設後、『当代記』の慶長十六年（一六一二）十二月上旬の記事によれば、「新庄駿河、於下総国法度所鷹を遣、鳥見の者江戸へ令言上、依之駿河父子退散²⁴」とあり、常陸国麻生藩主新庄直頼は、幕府が捕鳥を禁止している下総国内で鷹を使ったことがその地の鷹場を支配していた鳥見に露顕し、そのことが鳥見から幕府に報告され、直頼父子は退散したという。鳥見は鷹場を支配する役人であり、この役人の管轄下にあった下総国内は幕府の鷹場に指定されていたことを示すものであろう。このように、幕府鷹場では幕府の許可なく、たとえ大名であっても鷹狩をすることができなかったのである。

いっぽう、上総国東金岡辺地域は、天正十八年以来、徳川氏の鷹場に指定されていたとの由緒をもっている。慶長十九年正月には大御所の家康がはじめて東金で鷹狩をおこない、以後も將軍の鷹狩の地となり、そのために御成街道が築造され、その沿道には御殿・御茶屋が建設さ

れた。また鷹場の支配も徹底し、代官や鳥見らがその支配にあたった。〔厳有院殿御実紀〕の寛文十二年（一六七二）三月二日条には、「狩場にて鳥とりし者捕へたるにより、東金鳥見所屬の同心に銀賜ふ」とあり、幕府鷹場で鳥を捕獲した者を捕縛したことにより、「東金鳥見所屬の同心」が幕府から褒美をもらっていた。「東金鳥見所屬の同心」とは、幕府鳥見に属して鷹場支配にあたっていた者で（一時期、幕府代官に属したこともある）、在地の者のなかから選ばれていた。家康の関東入国以来、東金鷹場には一五名の者がその任にあたり、在地では「鳥見」と称されていた。のち、この役職は幕府の職制上、郷鳥見と呼ばれ、享保期に野廻りと改称された。

（二）隼の捕獲をめぐる幕府権力と地域社会

戦国末期には、戦国大名北条氏が独占していた下総国内に飛来した隼は、以後その入手をめぐるような社会関係が築かれていたのであろうか。ここでは、上総国内を含めて考えていくことにしたい。

近世初期以来、下総・上総両国内の民衆は鷹場支配の面でもきびしい規制を受けていたのだが、いっぽう幕府との間で隼の捕獲をめぐる互酬的關係を結んでいた。

次の史料は、「東金御鷹場旧記」²⁶⁾に記録されているもので、両国内に近世初期から広範に存在した五郷組（基本的には五か村が一組となつて結成した村々の連合組織）が隼の捕獲をめぐる誓約した請書である。宛先は記載されていないが、鷹場法度の請書と一体になっているところから、おそらく鷹場役人に提出されたものであろう。これに連判した村々は、九十九里海岸の内陸部に位置つき、その規模は下総・上総両国内の五郷組が八八組、総村数約四〇〇か村、そしてその総石高は約一四万石に及ぶ地域であった。²⁷⁾作成年代は記されていないが、ここに記載されている領主名などから寛文末期から延宝初年（一六七

○年代）の史料と推定される。

指上申一札之事

- 一、忝番鷹、御運上ニ差上可申事
- 一、鷹打申札請不申以前ニ、隼取罷出申間鋪候
- 一、鷹打申儀、組頭可任差図事
- 一、鳩ヨリ外之鳥ニ而、隼打申間鋪候事
- 一、鷹打申札、十月切ニ急度指上可申事
- 一、組頭者御運上御赦免、乍去其組ヨリ御運上指上不申以前ニ隼打申候ハ、御運上指上、其跡ニ打申隼ヲ其代ニ取可申事
- 一、隼打申候ハ、早速御注進可申上候事
- 一、御運上之鷹、直段売買ニ金高イタシ、十月切ニ鷹打方へ急度金子相渡シ可申事
- 一、御運上差上申事者鷹懸リニ致、隼不取モノハ御運上差上申間鋪候事
- 一、鷹打申面々、組頭迄請人手形相渡シ可申事

為後日仍面如件

東金組

- | | | | |
|----------|-------------|-----|-------|
| 一、七百五拾石 | 野村彦太夫御代官所上ル | 東金町 | 平兵衛 |
| 一、千四百五拾石 | 土屋但馬守知行 | 台方村 | 弥左衛門 |
| 一、貳百五拾石 | 同 | 断 | 大豆谷村 |
| 一、八百五拾石 | 松平和泉守知行 | 田中村 | 平兵衛 |
| 一、三百石 | 青木与右門知行 | 山田村 | 玄番 |
| 油井組 | | | |
| 一、(空欄) | 島田出雲守知行 | 油井村 | 九郎左衛門 |
| 一、三百八拾石 | 土屋但馬守知行 | 小野村 | 太郎左衛門 |
| 一、三百五拾石 | 和田彦右衛門知行 | 同村 | 平左衛門 |

一、百廿石 黒川丹波守知行 瀧村 次郎兵衛
 一、三拾壹石 建部伝内知行 丹尾村 三郎左衛門
 一、四拾六石 本多四郎左衛門知行 丹尾村 三郎左衛門

福俵組

一、千三百四拾石 松平和泉守知行 福俵村 五郎左衛門
 一、貳百拾七石 同 上谷新田 勘解由
 一、三百五拾石 大久保彦兵衛知行 押堀村 五郎右衛門
 一、三百石 同 川場村 治郎左衛門
 一、三百五拾石 同 堀上村 作左衛門

内

一、拾五石七斗貳升 渡部半三郎知行 中島村 久兵衛
 (略)

この地域の村々は、鷹打、すなわち鷹(隼)の捕獲を許され、その代わりに運上を上納することになっていた。その際、隼の捕獲と運上の上納とをめぐってはさまざまな決まりがあった。一番鷹、つまりその年の最初に捕獲した隼は運上として上納すること。また、鷹打人には鑑札が渡されたが、その交付以前に隼を捕らないこと。鷹打にあたっては各村の組頭の指図を受けること。隼を捕獲する際に使う罠用の鳥は鳩のみとすること。鷹打人に交付された鑑札は、毎年十月をもつて返上すること。各村の組頭は原則的に運上を免除するが、組内の者の運上上納以前に隼を捕獲した場合には、組頭であっても運上を上納することとし、のちに捕獲した隼を上納すること。隼を捕獲した場合にはすぐに報告すること。運上として上納する隼は売却して換金し、毎年十月までにその金銭を鷹打人に渡しておくこと。この運上というのは隼を捕獲した者だけが上納し、そうでない者は上納の義務がないこと。鷹打人は保証人の手形を組頭に提出すること。このような事項に違反しないことを誓約したのがこの一札である。

近世前期、九十九里沿岸地域の村人の一部は、領主から隼を捕獲する特権を獲得していたいっぽうで、運上を上納する義務を負っていた。つまり、隼捕獲の特権付与と運上の上納とが領主と民衆との間で互酬的関係になっていた。もちろん、この時期どの程度隼を捕獲できたかは定かでないが、地域民衆が隼の捕獲をめぐって請書を提出していたことからすれば少なからず鷹打がおこなわれていたのであろうし、そのことで隼を売却し生活の糧としていたことが十分に推察される。

天正末期、下総の隼は在地領主としての千葉氏一統からその上位権力としての戦国大名北条氏に献上するシステムができあがっていたのだが、その九十年後には地域民衆が幕府から隼の捕獲を許され、その代わりに運上を上納していたことが確認できた。なお、千葉氏一統が北条氏に隼を上納していたからといって、自ら隼を捕獲していたとは思えない。おそらく千葉氏一統は地域住民に隼の捕獲を許し、その代わりに一部を上納させ、それを北条氏に献上していたものであろう。

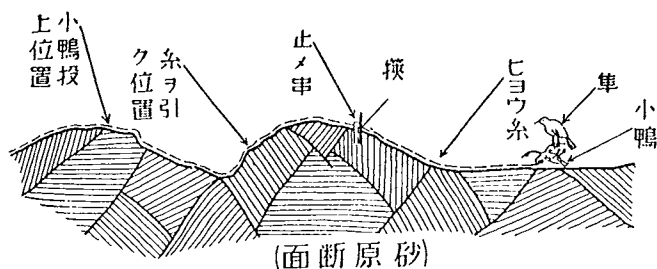
ところで、江戸幕府は御巢鷹山の管理のために、寛永三年(一六二六)幕領農村に「巢鷹の制」⁽²⁶⁾を発令し、村落の五人組に鷹巢の番を義務付け、巢鷹の発見者への褒美とその盗難者の処罰を明記し、その保護と責任が五人組の連帯責任であることを明示した。この法令は五人組結成の比較的早期の史料としても貴重なものだが、鷹の保持は幕藩領主の権限、その管理は村落の義務であることを規定したものである。御巢鷹山の場合には一般には巢守などが設定されていることが多いが、隼が海岸付近にやってくるのは不定期であり、その捕獲は在地住民に委ねられていた。鷹の種類によって、その管理・捕獲体制は異なっていたのである⁽²⁷⁾。

このように、江戸幕府は隼の捕獲・上納をめぐって、少なくとも戦国期以来の地域の伝統を継承し、それを自らのもとに編成しなおした。その際、在地領主の介在を許さず、幕府(幕府役人)と村落との間で

互酬的関係をつくりあげ、隼の入手を可能にしたのである。鷹場の設定や管理も同様な事情であつたろう。自然資源としての隼や鷹狩の獲物となる鳥類は、幕府鷹場では特例を除いて潜在的に將軍権力に帰属していたのである。

結びにかえて

以上、下総・上総両国内に生息した隼の入手をめぐる社会関係を素描してきた。史料の制約もあり、その全体像を把握できないが、房総の歴史でこれまで触れられることがなかった部分が多少なりとも明らかになったのではないかと思われる。なお、検討課題は多いが、隼が飛来したという地域特性のもとで、権力者と地域社会との間にはさまざまな社会関係が築かれていたことを察していただけるであろう。



隼の捕獲図(『放鷹』324頁より引用)

そこで、隼をどのように捕獲していたのかを、宮内省が編纂した『放鷹』³⁰⁾から紹介することで、結びとしたい。一般に、隼の捕獲は、隼が北方から南方に飛来してくる十一月中旬から下旬にかけておこなわれる。隼の飛来が確認できた時、麻糸(ヒョウ糸)でつないだ四用の鳩などを天空高く投げ上げる。隼は鳩が飛ぶのをみて襲いかかり喰いつく。頃合いを見計らい、鷹打人が隼に近寄り、少し離れた所に鳥綱をつけた撲(直径一センチメートル、長さ七五センチメートルの竹棒)を地面

に突き刺し、また止め串(直径六ミリメートル、長さ六〇センチメートルの鉄棒を頭髮用のピンのように二つ折りにしたもの)も地面に突き刺しておく。その際、撲の中央が麻糸の真上になるように立てておくことが重要であつた。この装置ができたら、鷹打人は身を隠しつつ、鳩がつかがれている麻糸を徐々に引く。隼は鳩が逃げていくと勘違いして、鳩を押さえつけながら引き寄せられてくる。ついに撲の所まで引き寄せられると、止め串の所でとまる仕組みになっていた。羽ばたきをすれば、撲を両翼に背負うことになり、その重さで飛び立つことができなくなる。そこで鷹打人が近寄って隼の脚を押さえ捕まえる。この時、隼に直ちに肩衣(隼の両翼を包み込むために赤色木綿でつくった衣類)を着せ、頭には帽子(漆を塗った紙および布でつくった頭巾)をかぶせて、捕獲は完了したのである(上掲の「隼の捕獲図」を参照)。

少なくとも戦国期から近世前期まで、下総・上総両国内では隼の捕獲の技術が伝承していた。この捕獲がいつまで継続していたのかは定かでないが、人は自然からさまざまな恵みを受け、その恵みの分配をめぐる権力者と地域住民との間にはさまざまな社会関係が築かれていた。その社会関係の構築には、地域で培われた伝統文化と権力者・民衆間で作り上げられた互酬関係が作用していたといえるだろう。

註

(1) 塚本学『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア』(一九八三年、平凡社選書八〇) 九二―九八頁。このなかで、塚本氏は「御鷹の概念は、すべての鷹を、最高権力者の下におくだけでなく、またその鷹を用いての、国土全域での狩猟を正統化する論理にもなった。そして徳川政権の御鷹支配は、このような天皇家の権限を継承する性格をもったものではなかったろうか」(同書九二―九三頁)と推量するいっぽうで、「徳

川政權の御應支配は、古代天皇家のそれをうけつぐものであったと同時に、また古くからこれと拮抗し、あるいはこれと補充しあった在地領主の應支配権を吸収するものであった」(同書九七頁)としている。拙著『將軍の應狩り』(一九九九年、同成社江戸時代史叢書3)三三八頁、同『江戸幕府放應制度の研究』(二〇〇八年、吉川弘文館)二二五頁。

- (2) 日向の應栗山に関する研究としては、芥川龍男『戦国武將と應―太閤秀吉の日向應栗奉行設置をめぐる―』(豊田武博士古稀記念『日本中世の政治と文化』所収、一九八〇年、吉川弘文館)、上州の御栗應山に関する研究としては、中島明『御栗應山』研究序説―山中領上山郷に例を求めて―(『群馬県史研究』第二号、一九七五年)、須田努『山間地域(石高外領域)における『公儀』支配と民衆生活―御栗應山制度と御應見役をめぐる―』(関東近世史研究』第四号、一九八八年)がある。

- (3) 菊池勇夫『應と松前藩』(蝦夷地・北海道―歴史と生活』所収、一九八一年、雄山閣出版)、同『幕藩体制と蝦夷地』(一九八四年、雄山閣出版)二六〇四九頁、第一部第二章『應儀礼にみる松前藩の位置』、長谷川成一『應・應献上と奥羽大名小論』(『本荘市史研究』創刊号、一九八一年)、同『近世国家と東北大名』(一九九八年、吉川弘文館)、岡崎寛徳『近世武家社会における應贈答の構造―彦根藩井伊家を中心として―』(『近世国家の成立・展開と近代』所収、一九九八年、雄山閣出版)、同『献上應・下賜應の特質と將軍權威』(『弘前大学国史研究』第一〇六号、一九九九年)、同『幕府生類憐れみと大名の應贈答―津輕家を事例として―』(『大倉山論集』第四三輯、一九九九年)、同『享保期における應献上と幕藩関係―津輕家を事例として―』(『日本歴史』第六二二号、二〇〇〇年)、同『文久期の献上統制と馬・應―津輕家を事例として―』(『大倉山論集』第四五輯、二〇〇〇年)。

- (4) 拙稿『江戸幕府應場制度の形成と機能―上総国東金御應場を中心として―』(『法政大学大学院紀要』第五号、一九八〇年)、同『江戸幕府應場制度の成立過程』(『幕藩制社会の展開と関東』所収、一九八六年、吉川弘文館)。

- (5) 中島欣也『應狩に生きたハヤブサ』(『アニマ』第一五卷第三号、一九八七年)。

- (6) 『諸国應出所地名』独立行政法人国立公文書館蔵。

- (7) 『應出所名録』(宮内省編『放應』(復刻版)、一九八三年、吉川弘文館)。

- (8) 『家忠日記』(『増補続史料大成』一九)、四三八頁。

- (9) 右同、四四二頁。

- (10) 右に同じ。

- (11) 右同、四四四頁。

- (12) 右同、四四六頁。

- (13) 『梅津政景日記』七(『大日本古記録』)、七八〇七九頁。

- (14) 右同、二九六〇、九七頁。

- (15) 右同、三二四頁。

- (16) 『梅津政景日記』五(『大日本古記録』)、一〇九〇一〇頁。

- (17) 右同、二二二、二四頁。

- (18) 右に同じ。

- (19) 註(16)に同じ。

- (20) 註(17)に同じ。

- (21) 『梅津政景日記』三(『大日本古記録』)、二五〇二五二頁。

- (22) 『神奈川県史』資料編、古代・中世三下、一九四頁。本史料の分析は、盛本昌広『戦国期の應献上の構造と贈答儀礼』(『歴史学研究』第六六二号、一九九四年)でも行われている。

- (23) 『千葉県史料』中世篇・諸家文書、二五三二五四頁。同書には天正八年に千葉氏が井田氏に対して同様の規制を行っていた史料が収められている。

- (24) 『史籍雑纂・当代記・駿府記』、一七七頁。

- (25) 『新訂増補国史大系・徳川実紀』第五篇、一二六頁。

- (26) 『改訂房総叢書』第五輯所収の『改訂房総叢書』第十卷、(雑書・抄本・索引、七一―九七頁)。

- (27) 拙稿『近世における郷組の存在とその意義―総州の五郷組合を中心に―』(『法政史学』第三二号、一九七七年)。

- (28) 『御当家人條』三七八号(『近世法制史料叢書』)。

(29)

たとえば、慶長年間における信濃国安曇郡内の小笠原秀政領の御果鷹山では鷹待衆が設定されており、鷹の監視と捕獲がおこなわれていた。このため、かれらにはその役と引替えに諸役免除の特権が与えられていた。つぎの史料は、慶長二十年正月晦日に秀政が中堂の助十郎に発給した朱印状である〔信濃史料〕第二十二巻、九頁〕。(朱印、小笠原秀政) 毎年鷹待候ニ付而、地役八石之所并其身之役共ニ免置候、以此旨、無油断鳥屋之儀精ニ入可申候、若無沙汰仕候者、可為曲事者也、仍如件

慶明ノ

正月晦日

中堂

助十郎

(30)

『放鷹』(復刻版)、三三九―三四二頁。本書では、隼をおびき寄せる川(川)の鳥として小鴨が用いられている。これは宮内省に伝来した捕獲法であろう。また、本書が編纂された昭和六年(一九三一)当時、隼が捕獲されていた場所は、茨城県鹿嶋郡軽野・若松両村の砂原であった。この地域は、近世においても隼の産出地として知られたところであったが、近代以降においても隼の捕獲がおこなわれていたのである。